

石牟礼道子『苦海浄土』刊行史および 評価の変遷

林宜蓁

はじめに

石牟礼道子(1927-2018)の代表作『苦海浄土』は、四大公害病の一つである「水俣病」をテーマとした作品である。1954年頃から熊本県水俣を中心とする八代海沿岸漁民は、新日本窒素水俣工場の排水に含まれる有機水銀によって「水俣病」の症状に苦しめられるようになる。手足が痺れ、言語に障害をきたし、衰弱、死に至るか、必ず後遺症を残す病である。「水俣病」をテーマとした『苦海浄土』は現在英語、ドイツ語にも翻訳されており、日本語を母語とする人以外にも開かれた文学作品となっている。『苦海浄土』には、主として以下のような視点からの先行研究がある。

(1) 公害問題を中心にしたエコクリティシズムの視点からの研究¹。(2) 医学政策の視点からの研究²。(3) 政治に関する文学の視点からの研究³。(4) 地域に関わる民俗学的研究⁴。(5) 禅・霊性/宗教・神話の視点からの研究⁵。(6) 石牟礼道子関係者についての研究⁶(特に、40年以上彼女の編集者を勤めた渡辺京二関連が多い)。(7) 俳句、詩歌など日本文学史の視点からの研究⁷。(8) 翻訳・文体などの視点からの研究⁸。『苦海浄土』に関する先行研究や評論の論点は以上のように多岐に渡っている。

その評価はいまだ定まっておらず、種々の意味で「現在進行形」の大作といえることができる。そこには、『苦海浄土』が政治性と文学性という単純な二分法からすりぬける作品であったことと同時に、一主婦であった石牟礼の作品を当時の男性中心の文壇・論壇が評価しきれなかったという問題が見いだせる。例として、評論家磯田光一はある対談の中、自分がもし患者だったら、変な女が聞き書などをとり来たら家に入れずに追い返すだろうという趣旨の発言をしていた⁹。本稿の目的は、『苦海浄土』の刊行史と評価の変遷を書誌学の方法論を踏まえて調査し、考察することによって、石牟礼という女性作家が直面せざるをえなかった困難を把握し、作家および『苦海浄土』研究の基礎を固めようとする試みである。

本稿ではまず『苦海浄土』の各版の変遷を調べ、70年代から現在に至る50年間の研究及び評論を概

観したい。その作業によって各時代でどのように『苦海浄土』が読まれてきたのかが理解でき、それを通じて、現在『苦海浄土』がどのように受容されつつあるかもよりよく理解されるだろう。

第1章 講談社 1969年版『苦海浄土—わが水俣病—』(昭和44年6月23日刷発行)について

第1節 出版の経緯

石牟礼とは「サークル村」の同志であり炭鉱記録文学作家である上野英信¹⁰(1923-1987)は『熊本風土記』に載った『苦海浄土』の初稿を読み心を打たれ、これをできるだけ多くの人に読んでもらえるようにしようと決意した。まず岩波新書として出したいと思い、岩波書店に原稿を持ち込んだが、新書の編集部員は誰一人としてこの原稿を評価せず、出版はかなわなかった。上野は岩波書店の編集者がこの作品を理解しないことに虚しさを覚えたが、日本の大手出版社に理解されなかったこの作品が、海外では1973年にフィリピンでマグサイサイ賞を受賞するほど高く評価されたことは皮肉といえよう。石牟礼は『苦海浄土』が日本で理解されなかった原因について、「この世になじまない(略)スーッと入りにくい」性格があるからであると述べている¹¹。その理解されにくい性質について、米本浩二は「石牟礼道子は渚に立つ人である。前近代と近代、この世とあの世、自然と反自然、といった具合に、あらゆる相反するもののはざまに佇んでいる」¹²という「渚性」について論じている。また田中優子は『苦海浄土』の様相は「単純ではなかった。二つの世界は入れ子状になり、錯綜し、矛盾もして、石牟礼道子はいくつもの自分に裂かれていた。はざまに一人の統一された個人が生きていた、というより、分け裂かれて幾人もの道子が同時に生きた。」¹³と述べている。そうした作品の特性そのものと、石牟礼文学がはらむ非近代性、非物質的な魂を重視する姿勢(さらに言えば、当時の出版社のチツソに対する遠慮)が、『苦海浄土』が出版当時に日本で理解されなかった理由となると思う。

第2節 ルポルタージュ作品としての1969年版

1969年版の『苦海浄土—わが水俣病—』は、はじめて水俣病について全体的に語る作品であったためか、「ルポルタージュ」的な傾向が色濃い。当時まだ

世にあまり知られていなかった水俣病の紹介をするため、カバーでは以下のような説明が載せられている。

▼ 水俣病とは、工場排水などに含まれるメチル水銀化合物が、魚や貝などの中に蓄積され、これを食べることによって起こる中毒である。中枢神経が侵されるので、手足が麻痺し、歩行は困難に、目、耳は不自由になり、知能障害を伴い、ついには死に至りあるいは廃人になってしまう恐ろしい病である。

▼ 昭和四十三年九月、実に、第一号患者が発生して以来十五年目に、政府は水俣病を「公害病」と認定した。しかし、そのときまでに、熊本県の水俣病患者数は、死者四十二人、患者六十九人（うち胎児性水俣病患者二十人）に達していた。また、新潟県阿賀野川流域でも、同様の水俣病が発生している。

▼ 不知火の平和な海で、漁を生業としていた人びとに訪れたいわれなき死—本書は、天草に生まれ、水俣に育った著者が、「公害」に生命を奪われ、未だに故郷の地に迷う死霊・生霊たちになりかわって、心からの悲しみと怒りをこめて、水俣病の悲惨を克明に綴った記録である。

▼ 死につつある患者の吐く「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。上から順々に、四十二人死んでもらう。奥さんがたにも飲んでもらおう。そのあと順々に六十九人、水俣病になってもらおう。それでよか」という強烈な呪詛—この苦しみを著者自らの痛みとし、患者とその周辺からの聞き書きを中心に、真実を直視した本書は、現代の記録として、怒りと祈りの書として、必ず、歴史に残る貴重な証言となろう。

水俣病の定義、症状、影響範囲、患者の心境を読者に伝えようとする意欲が強く感じられる。特に「水俣病の悲惨を克明に綴った記録である」、「患者とその周辺からの聞き書きを中心に」書いた「本書は、現代の記録として」、「必ず、歴史に残る貴重な証言となろう」という叙述は、『苦海浄土』をまったくルポルタージュ作品として位置づけようとする出版側の意志を感じる。

1969 年版『苦海浄土—わが水俣病—』に多くの写真が載せられていることは今では忘れられがちな事実である。土門拳賞受賞の報道写真家・桑原史成¹⁴

(1936～) が全ての撮影を手掛けている。目次の前の写真には、「本文 p. 218 ページ『草の親』参照」のようなキャプションが付されている。また第 1 章「椿の海」の「山中久平少年」の篇にも山中久平本人の写真¹⁵を載せ、下には山中少年の写影であることが明記されている。こうした写真の配置は、ルポルタージュとしてのこの版の真実性・信憑性を高めるための効果を強めていると言えるだろう。

上の二例以外にも、それぞれの篇について写真が付されている。目次の前の 2 枚も含め、全篇にわたって、計 23 枚の写真が掲載されている（詳細は表 1 にまとめた）

しかし 1969 年版のこのようなルポルタージュとしての性格づけは必ずしも石牟礼の意思による結果ではなかった。石牟礼は出版以前に上野英信に初稿をのせた『熊本風土記』を預けたことをまったく忘れており、水俣の市民集団をつくる下準備に没頭していて、出版については関わる事がほとんどなかった¹⁶。よって 1969 年版の『苦海浄土—わが水俣病—』に見られるルポルタージュ性の強調については、おそらく石牟礼の本意ではなかったであろう。

第 3 節 作者紹介の文について

1969 年版のカバー裏の作者紹介にも注目すべきことがある。以下に引用する。

石牟礼道子 一九二七年熊本県天草に生まれ、生後三ヵ月より水俣に在住。不知火海は揺籃の海である。祖父の事業の失敗から、幼時より貧苦を道づれとし、「新興の煙をポッポと吐くチッソ工場の下、村から町になってゆく、その下層社会の形成とともに」育った。

小学校は無欠席、三年の町立実務学校は図抜けた成績で終了、望まれて十六歳で代用教員となる。十九歳で終戦、“一億玉砕教育”の一端を担ったと自責して退職。翌一九四七年結婚。以後さしたる職にもつかず、主婦業に携わるかたわら「サークル村」に参加もしたが、一九五三年水俣病第一号患者発生以来、「水俣病はわたしたち自身の中樞神経の病い」と宣言、以後十余年にわたって、患者一人ひとりからの克明な聞き書きを記録し、人間の生命に加えられた耐えがたい汚辱を告発しつつ、未だ立ち迷っている“死霊・生霊”たちにかわって、現代の“語部”として土語による“文闘”を執拗にくり展げている。

現在、水俣病市民会議会員。また「熊本風土記」および二人合議制による個人誌「高群逸枝雑誌」の同人。

この紹介文は、石牟礼の出身と生育の地縁性と階級性を強調しつつ、「チッソ工場」と「下層社会」との対立を暗に示唆しており、中立な作者紹介になっているとは言い難い。「十九歳で終戦、“一億玉砕教育”の一端を担ったと自責して退職」、「『サークル村』に参加」という政治的な意識や行動を押し出しているのみならず、「患者一人ひとりからの克明な聞き書きを記録し」という叙述によって、本書の基盤が「聞き書き」にあることを断言している。また「現代の“語部”として土語による“文闘”を執拗にくり展げている」という表現には、この時代に盛んであった学生による左翼運動の影響が色濃くうかがわれる。現在でも、「水俣病市民会議会員」の揭示は「文学者」より「社会運動者」として石牟礼を位置づけている。

またこの版には、著者紹介と同時に「熊本県水俣市日当猿郷郵便番号 867」という連絡先が書かれてある。著作者の住所を書籍巻末に記すことはある時期まで珍しいことではなかったが、『苦海浄土』についてはこの版のみで、以降の版には見られない。

第2章 講談社文庫 1972 年版『苦海浄土－わが水俣病』（昭和 47 年 12 月 15 日第 1 刷発行）について

第1節 ルポルタージュ性の削除

1969 年初版の、チッソ工場より廃棄されたカーバイド滓のカバーと対照的に、1972 年の講談社文庫版は書名の仏教性と呼応するかのように山本正勝撮影の法隆寺金堂内陣旧壁画（小壁飛天図）をカバーとして取り入れている。目次はほぼ 1969 年版と同じであるが、「改稿に当たって（石牟礼道子、1972 年 11 月 9 日）」と「石牟礼道子の世界（渡辺京二）」の 2 篇が新しく加わっている。もっとも大きな変化は、全編に添えられていた多くの写真がすべて取り除かれたことだ。明らかに 1969 年版のルポルタージュ的な性質が薄められている。そして、1972 年版講談社文庫第 1 刷カバーの裏面には、

公害という名の恐るべき犯罪－“人間が人間に加えた汚辱”－水俣病。昭和 28 年 1 号患者発生来十余年、水俣に育った著者が患者と添寝せんばかり

に水俣言葉で、その叫びを、悲しみ怒りを自らの痛みとし書き綴った《わがうちなる水俣病》。凄惨な異相の中に極限状況を超えて光芒を放つ人間の美しさがきらめく。

と書かれている。たしかにこの文庫本が水俣病と患者の状況を題材としていることはわかるが、「記録」、「聞き書き」、「証言」など、ルポルタージュを連想させる言葉は用意周到に取り除かれている。

第2節『苦海浄土』の「文学」化

評論家・思想史家の渡辺京二¹⁷（1930～）は 1972 年版『苦海浄土』の本文の後に「石牟礼道子の世界」という文章を執筆している。彼はこの中で『苦海浄土』の「聞き書き」、「ルポルタージュ」性を否定し、かわりにその「私小説」性を強調した。

実をいえば『苦海浄土』は聞き書きなどではないし、ルポルタージュですらない。ジャンルのことをいっているのではない。作品成立の本質的な内因をいっているのであって、それでは何かといえ、石牟礼道子の私小説である¹⁸。

『苦海浄土』の成立の初期から関与していた渡辺の言葉によれば、石牟礼はこの作品を書くため、患者の家にしげしげと通うことはなく、せいぜい一度か二度しかそれぞれの家を訪ねたことしかないそうである。ノートやテープコーダーは持たず、まるで近所の姉さんのように患者さんと接して、「そういうふれあいの中で、書くべきものがおのずと彼女の中にふくらんで来た」¹⁹結果が作品に結実しているという。

渡辺自身も最初は『苦海浄土』の一部は聞き書きの記録だと考えていた。

私は、それが一般に考えられているように、患者たちが実際に語ったことをもとにして、それに文飾なりアクセントなりをほどこして文章化するという、いわゆる聞き書きの手法で書かれた作品（だと思った）²⁰

その認識はほどなくして改められる。石牟礼は水俣病院に坂上ユキを見舞った時、半開きの個室のドアから、死にかけている老漁師、釜鶴松の姿をかいま見、深い印象を受けるのだが、渡辺は「彼女は

この時釜鶴松に文字どおり乗り移られたのである。彼女は釜鶴松になったのである。なぜそういうことが起こりうるのか。そこに彼女の属している世界と彼女自身の資質がある」²¹とその瞬間のことを言語化している。患者からの「聞き書き」の手法で書かれたのではなく、石牟礼は患者たちと同じ地縁に育ち、共同的な感性の根があるから、彼女は患者たちに成り変わることができたと渡辺は考えたのだ²²。渡辺は最終的に「彼女の描く前近代的な世界は、なぜかくも美しいのか。それは、彼女が記録作家ではなく、一個の幻想的詩人だからである」²³と、石牟礼を詩人として位置づけ、彼女の作品の文学性を強調した。

本書が文庫という形で新しい読者に接するこの機会に、私は、本書がまず何よりも作品として、粗雑な観念で要約されることを拒む自律的な文学作品として読まれるべきであることを強調しておきたい²⁴。

後に作家・池澤夏樹²⁵（1945～）も同じ観点を持つことになる。池澤は石牟礼との対談で「僕たちは皆、石牟礼さんに騙されているのではないかと思って。（略）最初はね、『苦海浄土』がルポルタージュである、ノンフィクションである。（略）石牟礼さんがテープレコーダーを持って、水俣病の患者さんのところに行って話を聞いて、それをちゃっちゃっと文字にして本にしたんだ、というふうな読み方が世間に広まっていたと思うんです。でも実はそうではない。患者さんの言葉も、お話も、一旦全部石牟礼さんは自分の中に入れて、心の中にしまって、そのまま熟してくるのをずっと待って、それからご自分の言葉として患者さんのふりをしてお書きになってる……ということを渡辺京二さんがおっしゃった。」²⁶と述べている。これについて石牟礼も「はい、はい。」と即座に認めている。

第3節 大宅壮一ノンフィクション賞について

1972年版講談社文庫第1刷のカバーの裏には、「第一回大宅壮一ノンフィクション賞受賞」と明記されている。最後の1ページには、以下のような張り紙がある。

謹 訂正

本書カバー裏面の文章中、「第一回大宅壮一ノン

フィクション賞受賞」は、当出版社の誤りで、著者は受賞を辞退されました。

謹んで著者にお詫びし訂正いたします。

文庫出版部

1970年4月8日、大宅壮一ノンフィクション賞の受賞式が新橋の第一ホテルで催された。受賞者は『極限のなかの人間』を著した尾川正二と『苦海浄土』の著者石牟礼道子だったが、石牟礼は受賞を辞退したため欠席、会場に現れた受賞者は尾川一人だけだった。日本のノンフィクション界を牽引してきた大宅壮一ノンフィクション賞は、このときが第一回めであった。石牟礼の受賞辞退の弁は『文藝春秋』誌の「選考経過」によれば、「ご好意は大変ありがたいが、まだ続編を執筆中の現在受賞するのは、気も晴れない心境なので辞退したい」と述べている。さらに「わたし一人が頂く賞ではありません。水俣病で死んでいった人々や今なお苦しんでいる患者がいたからこそ描くことができたのです。わたしには晴れがましいことなど似合いませんのでお断りします」と石牟礼が述べたことも伝えている²⁷。それ以外にも、大宅賞に先立つ熊本日日新聞の熊日文学賞も石牟礼は辞退している。

大宅壮一賞の辞退について、石牟礼はのちに「ノンフィクション賞ということでしたので。聞き書きとして優れてるって意味でしょう。（略）聞き書きじゃないもん、と思って。（略）賞なんか貰ったら、これは患者さんの為というよりも、自分の文体の世界をつくりたかったのであんなふう書いた、と思われる。でも『聞き書きじゃありません』というわけもいかないので、黙って辞退しました」²⁸と述べている。つまり、石牟礼本人が『苦海浄土』のルポルタージュ性、「聞き書き」、ノンフィクション性を否定しているのである。

第4節 1969年講談社単行本『苦海浄土ーわが水俣病ー』と1972年講談社文庫本『苦海浄土ーわが水俣病ー』改稿について

1972年講談社文庫本『苦海浄土ーわが水俣病ー』には「改稿に当たって」という一文が加わっている。石牟礼は「このたび装をあらため、文庫本にして下さるに及び、心地悪かった箇所をいくらか手直しできる機会をえた」と述べている。改稿の前後にはどれくらいの差があるのを検討するため、『苦海浄土』の中でもっとも初期に成立し、引用されることも多

い第3章「ゆき女きき書」の「五月」篇について1969年版と1972年版双方の本文を比較検討した。その結果、一番多い変更は句読点と段落・字下げの修正、次は方言から標準語への修正（たとえば「どけんこってん考え出す」²⁹から「どういふことも考え出す」³⁰へ）。他には地名の修正、喋り言葉から書き言葉への修正、仮名から漢字への修正、「私」を「わたくし」として統一することなどで、内容の本質的な部分に関する変更は見られていない。

第3章 池澤夏樹の『苦海浄土』理解

作家の池澤夏樹は河出書房新社から発刊された『個人編集・世界文学全集』を編纂するに際して、日本文学にあてられた一卷に『苦海浄土』を選んだ（2011年）。池澤の『苦海浄土』理解を整理したい。

第1節 文体の理解

池澤は『苦海浄土』について「人間の深みに届くルポルタージュ文学になっている」³¹と述べている。「ルポルタージュ」について彼は、「ルポルタージュという種類の文学がある。日本で言うノンフィクションに近いけれど、もう一歩だけ文学に近い。書き手の個性も強く出るし、評論的な側面もある。」³²という。つまり、2011年において池澤は『苦海浄土』の文学性を否定しないが、全体的な評価としては「ルポルタージュ」として位置づけていた。

池澤によると、『苦海浄土』は社会性の強い作品であるという。第三部「天の魚」に見られるように、語り手である石牟礼は患者たちと東京のチッソ本社社長室まで赴く行動力を持ち合わせている。このような行動力が語り手をして患者側に立つことのできる当事者性を付与しているのだが、一方で石牟礼は状況を観察する人間として患者との間に一定の距離を置いている³³。池澤はこのような石牟礼の文体について次のように述べる。

この小説には三つの文体が用いられている。第一は作者とおぼしき「わたくし」の視点からの記述と描写、第二は患者やその家族の一人語り、第三は医師の報告書や官僚の作文などの直接の引用。第一と第二はしばしば融け合うが、第三は決して他と混じらない³⁴。

ここで注目すべきは「第二」の文体であり、それ

は患者の言葉を作者がそのまま記したものに見えるが、決して正義感の強い主婦が書いたノンフィクションではないと池澤は力説する。すなわち、この「第二」の文体は石牟礼の天才的な観察力、共感力、思索力、表現力と想像力、また「夢見る力」から生み出されているものに他ならないと語る³⁵。つまり、2011年において、池澤は『苦海浄土』を「ルポルタージュ」として位置づけてはいるものの、小説中の患者やその家族の言葉には創作が含まれていることを認めていた。

しかし、2012年6月に行われた池澤と石牟礼との対談を読むと、池澤の『苦海浄土』認識に変化が現れていることが認められる。医師の報告書や官僚の作文などから構成される「第三」の文体はノンフィクションもしくはルポルタージュと呼ぶにふさわしいものであるが、それ以外の、「第一」の「わたくし」の視点からの記述、そして「第二」の患者やその家族の一人語りはすべて石牟礼の創作であって、「ルポルタージュ」ではないと認識している。

2012年6月の時点で、池澤は『苦海浄土』が「ルポルタージュ」であることを否定している。石牟礼が患者の内面や状況などをいったん自身の中に取り入れた上で、自分の語りとして言葉を積み上げて創作していく方法に気づいたのである³⁶。

第2節 古代の幸福感

池澤によると、『苦海浄土』は凡百の公害がらみのノンフィクション類を圧倒して、人間の深みに届くルポルタージュ文学³⁷になっているという。その理由は「かつて水俣にあった幸福感の物語」を描くからである。『苦海浄土』の価値は不幸と対比するように幸福を描いているところだと考える³⁸。石牟礼の『椿の海の記』は水俣が古代的な幸福の地であったことを述べている。池澤がいう「古代的」の定義は、「近代の毒に犯されないまま」のものという意味である。『苦海浄土』には「古代的な幸福感」が巧妙に配置され、過去の眩しい残照として登場している。その光が眩しいから、近代の公害による不幸の闇が黒々と際立つのだ³⁹。不幸を書くには幸福を知らなければならぬ、そうしないと何が失われたのかわからない。石牟礼は水俣に住み人々の幸福を知っていたから、その幸福が失われたという認識が『苦海浄土』の出発点となるという⁴⁰。

水俣の前の海は不知火海、本当に魚が湧くような

海だった。目の前の海の魚を獲って暮らすという形は何千年も前から変わっていない。漁具は発達したかもしれないが、天候を読み、潮を読み、なによりも季節ごとの魚の行き来を読んで、網を仕掛け、釣り針を垂らす。古代以来彼は海幸彦だった⁴¹。

また、1973年に石牟礼は上野英信との対談で、次のように述べている。

近代に入りますと人間と人間との関係みたいなものがめんどくさくて、切っていくのがいい関係だというふうになってきて、とくに都市化するとなおそれが進みますね。でも本来は、人間の絆、人間だけではなくて、鳥獣魚類から一木一草にいたるまでの絆ですから、それがほんとに切れますと互いの生命がさびしがるというか、今の都市生活のなかで水俣病が起きていたら、いま起きているような質の訴求力は持ち得なかったろうと思います。都市市民が被害者であったならば、これほど人々の魂を奪ったかどうか。(略) 東京の場合にしても、形は過密ですけども、心のなかはすっかり過疎化してしまっておりますものね。そういう都市社会になっていけばいくほど、自己回復の願いが出てきている⁴²。

そしてそのような都会人の古代の幸福感へのあこがれと自己回復への願望が、たとえば東京のサラリーマンが水俣病運動者のテントを訪れ、資金や手紙を置いていくという行為として結実しているのではないかと語っている。

第3節 方言の魅力

池澤は何回も『『苦海浄土』は言葉がいい』⁴³と感嘆する。方言の魅力をここまで鮮やかに書き記す作家は石牟礼以外にいないと考えている⁴⁴。

水俣の方言で育った彼女はこの言葉に組み込まれた精妙な敬語のシステムを自由に駆使することができるだけでなく、詩や短歌で磨いた韻文の技法を磨きあげており、更に見聞のすべてを心で消化して新たに産み直す散文の力も備えていた。まるで一人で奏でるオーケストラだ⁴⁵。

石牟礼文学の魅力は方言を取り入れるだけではな

く、感性の豊かさとともに十代から携わってきた詩・短歌など韻文の創作の経験も大きな役割を果たしている。一方で、方言を取り入れることは他郷の者に理解する支障になるかもしれない。石牟礼はそれを解決するために、「前後に少し言葉を補い、漢字とルビを巧妙につかって意味と響きの両方を伝える」⁴⁶という技法を用いている。その一例として「漂浪く」に「されく」というルビをつけていることである。熊本方言の「されく」は「歩き回る」という意味である。「漂浪」の「さまよいあるくこと」の意味と結びつけているので、読者は言葉の意味と方言の響きの両者を同時に体験することになるという⁴⁷。

池澤は石牟礼の語彙の数の多さにも感銘している。きれいな言葉や言い回しをたくさん秘密の袋の中に持っていて、次から次へ出している印象を受けている。石牟礼はみずからの語彙を幼い頃の母、祖母の歌と伯父、祖父などの家族、親戚、隣人とのやりとりから収集した、と池澤との対談で述べている⁴⁸。

第4節 世界文学としての『苦海浄土』

池澤が『世界文学全集』を編纂した基本方針は、現在の時代と世界を読み解くべく、1945年以降の世界に顕著になったポストコロニアリズムとフェミニズム、そして女性の書き手を重視したことにある。「弱者の側に立つ」、「周縁の視点に立つ」、「女性の視点」などを強調している。池澤はこれからの世界は格差が拡大し、ますます悪くなると予測し、その世界に必要とされる文学を基準として選んでいる⁴⁹。その一冊として日本文学を代表するものが『苦海浄土』であったのだ。

近代以前の水俣にも不幸なことがないわけではなかったが、近代以降になると人々はお互いの顔を知らないまま、見ようとしないうちに殺すようになった。ヒロシマとナガサキの原爆はもとより、公害によっての死は、殺す側が相手の顔を見ないですむ死である。効率がよく、加害者は余計な良心の呵責を感じなくて済む⁵⁰。

非人間的な近代化がチッソを生み、水俣病を生んだ。元人間の患者も制度によって非人間化された。制度の側に立った人々は極力患者との対面を避けたのに対し、患者の方は相手を人間として自分の側に回収しようとする。『苦海浄土』が描いたこのような非人間 vs. 人間の図式、いわゆる水俣病を生んだ原理は、形を変えて世界中に出没し、今も様々な災厄に際して姿をあらわす普遍性がある。災厄を生き延び

て心を剛直に保つことを教える『苦海浄土』の価値はいまも高まっていると池澤は考えている⁵¹。

第4章 『苦海浄土』刊行史と評価の変遷

第1節 『苦海浄土』第一部の刊行史

『苦海浄土』の初期の発表媒体については、石牟礼道子自身の言によれば、

本稿一部は一九六〇年一月『サークル村』に発表、同年『日本残酷物語』（平凡社刊）に一部。後、続稿をのせるべく一九六三年『現代の記録』を創刊したが、資金難のため、チッソ安定賃金反対争議特集号のみに止まり、一九六五年、『熊本風土記』創刊とともに稿をあらため、同誌欠刊まで、遅々として書きつづけられた。原題『海と空のあいだに』である⁵²。

とある。また石牟礼は1969年版『苦海浄土』の「あとがき」では、作品について「私たちの作業を記録主義とよぶ」と記し、「苦海浄土」はまだ「未完」の「聞き書きフィクション」⁵³と定義する。そして第二部、第三部を執筆中であることを披歴している。謝辞として、上野英信、晴子夫人と渡辺京二、あつこ夫人、講談社の名前が挙げられている⁵⁴。

1972年12月15日第1刷発行の『苦海浄土一わが水俣病』のあとがきでは、石牟礼は前の版の「心地悪かった箇所をいくらか手直しできる機会をえた」⁵⁵と明言し、改稿したことを明らかにしている。

2004年7月15日第1刷発行の『新装版 苦海浄土 わが水俣病』は1972年12月に刊行された講談社文庫『苦海浄土一わが水俣病』を底本としている。原田正純氏の解説「水俣病の五十年」を加えた。障害や国名などの差別に関わる、2004年当時では使われない表現がそのまま使用されている。ただし「作品の歴史的価値を鑑み、また資料の引用や、当時の状況や文脈などにおいて必然的な表現と判断し、新装版でもこれらの表現を用いています」⁵⁶という断り書きが付されている。すなわち、2004年版で改稿・改訂された点は見当たらない。

第2節 『苦海浄土』第二部の刊行史

『辺境』は、1970年6月に創刊された井上光晴⁵⁷（1926年5月15日～1992年5月30日）編集の雑誌

である。第一次が1973年3月まで全10号（B5判）、続く第二次は1973年10月から1976年5月まで全4号（A5判）、第三次が1986年10月からから1989年7月まで全10号（A5判）である。創刊時、季刊を予定していた『辺境』は、第二次では年に1回発行のペースになっている。第三次には再び年3～4回発行となる。井上は、あえて『辺境』創刊の言葉を挙げていない。ただし、創刊の辞にあたる言葉が「編集後記」に綴られている。そこで井上は、「真実の文学はもともと心優しき叛逆者たちのものなのだ。誰か検閲者たちを顫えあがらせるような革命と性を描写する青年はいないか」⁵⁸と述べていた。石牟礼道子「苦海浄土・第二部」掲載分（全18回、第一次第二号～第六号、第八号～第十号、第二次第二号～第三次第二号、第四号、第五号、第七号、第九号、第十号）は、改稿の後、「苦海浄土 第二部 神々の村」として『石牟礼道子全集・不知火 第二巻』（藤原書店、二〇〇四年四月）に収載された⁵⁹。（表2）は雑誌『辺境』に連載された『苦海浄土・第二部』の一覧である。

第3節 『苦海浄土』第三部の刊行史

『展望』は、筑摩書房刊の総合雑誌である。第一次は1946年1月から1951年9月で69冊。第二次は1964年10月から1978年8月で167冊。臼井吉見⁶⁰（1905年6月17日～1987年7月12日）が編集長をしていた時期があった。石牟礼の『苦海浄土』第三部「天の魚」は1972年から1973年まで『展望』で連載されていた（全18回、第159号～第167号、第170号～第172号、第174号～第177号、第179号～第180号）。連載分をまとめる形で講談社から1980年4月14日『続・苦海浄土-天の魚』が出版された。その後この版は大幅改稿され、ルビと方言の説明を新たに付し『石牟礼道子全集・不知火 第三巻』に納められた形になった。（表3）は雑誌『展望』が連載された『苦海浄土・第三部』の一覧である。

石牟礼はこの作品は自分自身に語り聞かせる、浄瑠璃のようなものであると述べている。⁶¹1972年の第一部を再版した時に既に第二部、第三部を執筆しており、第四部まで書く予定が立っていた。石牟礼は第二部、第三部執筆半ばにして左眼の視力を失い、予定の第四部まで進む視力と気力を保つ自信がないと述べている⁶²。『苦海浄土』各版刊行の時間系列は（表4）に整理した。

第4節 『苦海浄土』に対する評価の変遷

講談社1969年版『苦海浄土-わが水俣病-』ははじめて水俣病について全体的に語る作品であったためか、書籍自体に「ルポルタージュ」的色彩が強く、またそのように評価される傾向にあった。第一回大宅壮一ノンフィクション賞に推挙されたのも、「ノンフィクション」としてこの作品が捉えられた証拠である。

講談社文庫1972年版『苦海浄土-わが水俣病-』では、その「解説」において渡辺京二は石牟礼を詩人・文学者として位置づけ、本書を「私小説」と呼び、文学作品としての立場を強く押し出してそれまでの認識を変えようとしている。

世界文学の中における日本文学の代表として、河出書房新社2011年版『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集 III-04』に『苦海浄土』を選択した池澤は、『苦海浄土』を「人間の深みに届くルポルタージュ文学」⁶³として位置付けている。しかし、2012年6月におこなわれた石牟礼との対談の記録によると、池澤は『苦海浄土』がルポルタージュではなく石牟礼の創作だと気づき、本書の文学性の見方が変わったという心境が語られている。池澤は『苦海浄土』の古代の幸福感と水俣病の悲惨さを対照する書き方、魅力的な方言、驚くほど豊富な語彙などを賞賛している。そして彼は弱者・女性・周縁の視点に立つという基準から、『苦海浄土』に描かれた「近代の「非人間化」の制度 vs. 人間の図式」は普遍的なものであり、いわゆる水俣病を生んだ原理は地域と言語を超えて、多種多様な災厄にあてはまるものであると考えている。そうした観点から池澤は『苦海浄土』が「戦後日本文学第一の傑作だと思う」⁶⁴と述べて、「世界文学全集」の中に唯一の日本の文学作品として選択したのである。

小結

石牟礼は2004年の初の全集版のあとがきに、『苦海浄土』の創作動機について「私が描きたかったのは、海浜の民の生き方の純度と馥郁たる魂の香りである」⁶⁵と述べている。つまり、石牟礼の『苦海浄土』最初の創作動機は中央から疎外され、古代的・前近代的な漁民たちの声を記録・代弁するものであった。しかし、「当時高度成長を目指して浮ついていた拝金主義国家に対して、真っ向から挑戦した言葉でもあった」⁶⁶と述べている。これを解釈すれば、

『苦海浄土』の創作動機には政治の現状を批判し、挑戦する意味が含まれていると捉えることが可能であろう。

実際、『苦海浄土』の刊行は、当時盛んになっていた市民運動の力となって支えることになった。そこには「文学」を超えて「政治」の領域に踏みこんでいった文章の力がはっきりと観察される。『苦海浄土』という作品は、近代的な個人の自己表現としての「文学」ではない。『苦海浄土』は俯瞰的な視点、ストーリーのスケールの大きさなどで、近代文学の「私小説」の域を超越した広がりを見せている。もちろん、私小説がいわゆるフィクションとしての小説より劣っているということをここで言いたいわけではない。そうではなく、従来の小説の分類では『苦海浄土』が捉えられないことを言いたいのである。

石牟礼が『苦海浄土』を書き出した当初は、おそらく「ジャンル」ということはあまり意識していなかったように思われる。当然、1969年のルポルタージュとしての出版も彼女の本心ではなかっただろう。

『苦海浄土』の分類されにくさについて、筆者は石牟礼の生い立ちに関連していると思っている。石牟礼は1927年生まれ的女性として、教育を受ける機会には恵まれたが、20歳になってすぐ職場から離れ、結婚して「家」という場所に縛り付けられていた。順調とは言えない出版過程からも分かるように、男のように正統とされていた文学概念を以て文壇に進出する道を歩むことはなかった。それは石牟礼の作品が日本文学の構造からはみ出し、うまくはまらなかった理由の一つとも言えるだろう。

では『苦海浄土』をどう評価すべきか。筆者は『苦海浄土』を、「ノンフィクションのようなフィクション」と捉えたい。無限にノンフィクションに近いフィクションこそ、絶妙な距離を保ちつつ生々しい現実の全貌を把握し、描出することができるのである。たとえば1985年のマーガレット・アトウッド(Margaret Eleanor Atwood)の小説『侍女の物語』(The Handmaid's Tale)にも見られるものである。『侍女の物語』の舞台であるギレアデ共和国は架空の宗教国家で、環境汚染、原発事故、遺伝子実験などの影響で出生率が低下し、数少ない健康な女性はただ子供を産むための道具として、支配者層である司令官たちに仕える「侍女」となるよう決められている。『侍女の物語』の女性が、女性であるがゆえに職業も財産も奪われているのは、アメリカの歴史的な事実を反映したものである。近年では、セクハラ告発

運動である #MeToo や中絶運動規制の動きが強まる中、このような現状と重ね合わせて読みとることのできる『侍女の物語』も、物語に登場する赤い衣装を着た女性たちによる抗議デモなどとして、運動の力になっている。「ノンフィクションのようなフィクション」は人々の注意を喚起し、社会運動と共に歩んでいく力を持っていると考えられる。

近年、災害が起きるたびに必ず『苦海浄土』が取り上げられるようになった。東日本大震災及び福島原発事件、熊本の震災など、枚挙にいとまがない。COVID-19 の蔓延によって世界の風景が変わった現在について、石牟礼ならどう観察し、どう言葉にしたであろうか。コロナ禍で経済的利益が優先され人命が犠牲になっていることについて、石牟礼なら何か考え、発言したはずだと確信している。2021 年には『苦海浄土』に触発されたアンドリュー・レヴィタス監督の、水俣病を題材とした「MINAMATA」という映画、原一男監督のドキュメンタリー映画「水俣曼荼羅」が公開される予定である。今こそ、石牟礼道子と『苦海浄土』が語るものに耳を傾ける必要があると考えている。

¹ 一例を挙げれば、金井憲一郎「石牟礼道子と環境法：環境法本
² 一例を挙げれば、米本浩二「水俣病に挑んだ石牟礼道子と 2 人の医師：『苦海浄土』から考える全人的医療」『月刊保団連』1276 号、全国保険医団体連合会、2018 年、pp. 34-38。
³ 一例を挙げれば、藤井聡「『国土の荒廃』を読む：石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』」/富岡多恵子『波うつ土地』、啓文社書房『クライテリオン=Criterion：表現者：「危機」と対峙する保守思想誌』9 号、2018 年、pp. 104-125。
⁴ 一例を挙げれば、中山修一「石牟礼道子の死去から一年・ハナシノブ考あるいは『沖宮』考」『Kumamoto：総合文化雑誌』26 号、くまもと文化振興会、2019 年、pp. 172-189。
⁵ 一例を挙げれば、早川敦子「越境する「命」の神話：石牟礼道子と翻訳の不/可能性」『津田塾大学紀要』51 号、津田塾大学全学研修・紀要委員会、2019 年、pp. 21-52。
⁶ 一例を挙げれば、井上洋子「石牟礼道子の「サークル村」体験：水俣と筑豊をつなぐもの」『リベラシオン：人権研究ふくおか』福岡県人権研究所、176 号、2019 年、pp. 31-42。
⁷ 一例を挙げれば、浅野麗「石牟礼道子の一九五〇年代の短歌について」『社会文学』49 号（小特集石牟礼道子）、日本社会文学会、2019 年、pp. 116-120。
⁸ 一例を挙げれば、早川敦子前掲論文（5）
⁹ 渡辺京二「石牟礼道子の世界」『苦海浄土—わが水俣病—』講談社文庫、1972 年、p. 309。
¹⁰ 上野英信：代表作『追われゆく坑夫たち』、『地の底の笑い話』など。
¹¹ 石牟礼道子と上野英信との対談『『苦海浄土』来し方行く末』『石牟礼道子全集・不知火』第 3 巻、藤原書店、2004 年、pp. 514-516。
¹² 米本浩二「序章」『評伝 石牟礼道子—渚に立つひと—』新潮社、2017 年、p. 13。
¹³ 田中優子「序章 石牟礼道子の重層する『二つの世界』」『苦海・浄土・日本 石牟礼道子 もだえ神の精神』集英社新書、2020 年、pp. 14-15。
¹⁴ 桑原史成：1962 年個展「水俣病」で日本写真批評家協会新人賞、2014 年写真展「不知火海」および写真集「水俣事件」で土門拳賞

を受賞。
¹⁵ 石牟礼道子「山中九平少年」『苦海浄土—わが水俣病—』講談社、1969 年、p. 11。
¹⁶ 前掲書（11） p. 516。
¹⁷ 渡辺京二：思想家、歴史家、評論家。1962 年から彼女が亡くなる 2018 年まで、石牟礼道子の編集者として彼女の執筆活動を支えた。
¹⁸ 前掲書（9） p. 309。
¹⁹ 同上 pp. 309-310。
²⁰ 同上 p. 311。
²¹ 同上 p. 312。
²² 同上 p. 315。
²³ 同上 p. 317。
²⁴ 同上 pp. 308-309。
²⁵ 池澤夏樹：小説家、詩人、翻訳家、評論家。翻訳はギリシア現代詩からアメリカ現代小説など幅広く手がけている。
²⁶ 「対談・石牟礼道子 X 池澤夏樹—記憶が紡ぐ、そして者物語へ」『池澤夏樹、文学全集を編む』河出書房新社、2017 年、p. 85。
²⁷ <https://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/110264.html>（2021 年 7 月 1 日閲覧）
²⁸ 池澤夏樹前掲書（26） p. 90。
²⁹ 石牟礼道子「五月」『苦海浄土—わが水俣病—』講談社、1969 年、p. 130。
³⁰ 石牟礼道子「五月」『苦海浄土—わが水俣病—』講談社文庫、1972 年、p. 133。
³¹ 池澤夏樹「月報・水俣の闇と光」『池澤夏樹＝個人編集・世界文学全集 III-04 苦海浄土』河出書房新社、2011 年。
³² 池澤夏樹「カプシチンスキ『黒檀』/石牟礼道子『苦海浄土』」『完全版・池澤夏樹の世界文学リミックス』河出書房新社、2011 年、p. 285。
³³ 池澤夏樹前掲月報（31）。
³⁴ 池澤夏樹前掲月報（31）。
³⁵ 池澤夏樹前掲月報（31）。
³⁶ 池澤夏樹前掲書（26） p. 85。
³⁷ 池澤夏樹前掲月報（31）。
³⁸ 池澤夏樹前掲書（32） p. 300。
³⁹ 池澤夏樹前掲月報（31）。
⁴⁰ 池澤夏樹「解説・不知火海の古代と近代」『池澤夏樹＝個人編集・世界文学全集 III-04 苦海浄土』河出書房新社、2011 年、pp. 763-767。
⁴¹ 池澤夏樹前掲書（32） p. 300。
⁴² 前掲書（11） p. 526。
⁴³ 池澤夏樹前掲書（32） p. 301。
⁴⁴ 池澤夏樹前掲月報（31）。
⁴⁵ 池澤夏樹前掲書（40） p. 768。
⁴⁶ 同上。
⁴⁷ 同上。
⁴⁸ 池澤夏樹前掲書（25） pp. 86-90。
⁴⁹ 池澤夏樹「世界文学と苦海浄土」『池澤夏樹、文学全集を編む』河出書房新社、2017 年、p. 82。
⁵⁰ 池澤夏樹前掲月報（31）。
⁵¹ 池澤夏樹前掲書（32） p. 301。
⁵² 石牟礼道子「あとがき」『苦海浄土—わが水俣病—』講談社、1969 年、p. 291。
⁵³ 石牟礼道子と上野英信との対談の石牟礼の発言『『聞き書きという形のフィクション』という方法論のほうから、逆に事実のデテールを照らし出してみる方法をとりました。』前掲書（11） p. 519。
⁵⁴ 石牟礼道子前掲書（52） p. 292。
⁵⁵ 石牟礼道子「改稿に当って」『苦海浄土』講談社文庫、1972 年、p. 304。
⁵⁶ 『新装版 苦海浄土 わが水俣病』講談社文庫、2004 年。
⁵⁷ 井上光晴：炭鉱労働を経て日本共産党に入党、内部批判して離党。炭鉱労働者、被爆者、被差別部落民など、社会の底辺における差別と矛盾をテーマとして小説を創作していた。
⁵⁸ 茶園梨加『『辺境』（第一次～第三次）・『兄弟』総目次と解説（特

集 井上光晴) 叙説舎編『叙説』3号、2012年、p. 38。

⁵⁹ 同上 pp. 38-39。

⁶⁰ 臼井吉見：編集者、評論家、小説家、日本藝術院会員。『安曇野』を執筆し、谷崎潤一郎賞を受賞した。

⁶¹ 石牟礼道子前掲書(55) p. 304。

⁶² 同上。

⁶³ 池澤夏樹前掲月報(31)。

⁶⁴ 池澤夏樹前掲書(32) p. 301。

⁶⁵ 石牟礼道子「あとがき一全集版完結にさいして」『苦海浄土 全三部』藤原書店、2016年、p. 1058。

⁶⁶ 同上。

(表1) 1969年版『苦海浄土』に載せている写真一覧(『苦海浄土-わが水俣病-』講談社、1969年)

篇名	ページ	写真のキャプション
目次の前	なし	水俣病のために変形し、機能を失った手
目次の前	なし	この少女は6歳で発病。目も耳も働かず、言語・知能障害、運動失調で、廃人となったまま、生きつづけている。 (本文218ページ「草の親」参照)
山中九平少年	11	山中九平少年
四十四号患者	35	船上に憩う母親たちの暗い表情
死旗	49	骨と皮だけの見る影もない姿となって
舟の墓場	74	浜に打ち捨てられた朽ちた船
昭和三十四年十一月二日	83	魚のいなくなった海を眺める漁師たち
	97	今はもうこの手はなにもつかまない
空へ泥を投げるとき	107	百間港に注ぐ工場の排水口
五月	117	うつろな腫、襲う痙攣
	135	煙草をふかす坂上ゆき
もう一ぺん人間に	141	魚が“たおれ”、海が生きていた頃
海石	179	爺様と杢太郎
	189	古畳の上を這う杢太郎少年
潮を吸う岬	199	水俣病に侵された子ども
さまよいの旗	215	死を待つばかりの重症水俣病患者
草の親	219	杉原ゆり(10歳のころ)
	229	女兒は二人とも胎児性水俣病
わが故郷と『会社』の歴史	244	新日本窒素肥料水俣工場の遠景
水俣病対策市民会議	253	この家にも水俣病患者が
いのちの契約書	263	子どものいのち五万円
てんのうへいかばんざい	281	病む水俣の姿(リハビリテーション病院で)
満ち潮	284	たとえ銭をもらっても

(表2) 『辺境』に連載された『苦海浄土・第二部』(茶園梨加『『辺境』(第一次~第三次)・『兄弟』総目次と解題(特集 井上光晴)』『叙説』3、叙説舎編、2012年、pp. 38-53を参考にした)

時間	次	号	篇名	ページ
1970年9月15日	第一次	第二号	苦海浄土・第二部 葦船の章	18-34
1971年1月20日	第一次	第三号	苦海浄土・第二部 葦船の章 さくら さくら	304-309
1971年4月20日	第一次	第四号	苦海浄土・第二部 神々の村	183-189
1971年7月20日	第一次	第五号	苦海浄土・第二部 神々の村	109-119

1971年10月25日	第一次	第六号	苦海浄土・第二部 神々の村 3	150-158
1972年6月20日	第一次	第八号	苦海浄土・第二部 神々の村 4	176-184
1972年11月1日	第一次	第九号	苦海浄土・第二部 神々の村 5	248-256
1973年3月1日	第一次	第十号	苦海浄土・第二部 ひとのこの世はながくして	24-32
1974年6月30日	第二次	第二号	苦海浄土 第二部 石牟礼道子	70-80
1975年4月10日	第二次	第三号	苦海浄土 第二部 その 10 ひとのこの世はながくして	48-64
1976年5月1日	第二次	第四号	苦海浄土 第二部 ひとのこの世はながくして その2	254-264
1986年10月1日	第三次	第一号	苦海浄土 (第二部) 一花ぐるま	11-23
1987年1月1日	第三次	第二号	苦海浄土 第二部 一花ぐるま (二)	305-311
1987年7月1日	第三次	第四号	連載 苦海浄土 (第二部) 花ぐるま (三)	272-283
1987年10月1日	第三次	第五号	連載 苦海浄土 (第二部) 花ぐるま (四)	317-331
1988年5月30日	第三次	第七号	連載5 苦海浄土 (第二部) 人間の絆	245-251
1989年2月28日	第三次	第九号	連載6 苦海浄土 (第二部) 人間の絆 (二)	331-339
1989年7月31日	第三次	第十号	連載七 苦海浄土 (第二部) 実る子	262-275

(表3) 雑誌『展望』に連載された『苦海浄土・第三部』(高塚雅・服部宏昭「雑誌『展望』総目次(その3)―昭和四十三年十月～昭和四十七年九月―/(その4)―昭和四十七年十月～昭和五十一年九月―中京大学リポジトリ」を参考にした。)

時間	号	篇名	ページ
1972年3月	159	【小説】天の魚(新連載)	38-51
1972年4月	160	【小説】天の魚(第二回)	29-44
1972年5月	161	【小説】天の魚(第三回)	94-102
1972年6月	162	天の魚(第四回)	108-117
1972年7月	163	天の魚(第五回)	92-109
1972年8月	164	天の魚(第六回)	114-121
1972年9月	165	天の魚(第七回)	60-71
1972年10月	166	【小説】天の魚(第八回)	92-107
1972年11月	167	【小説】天の魚(第九回)	133-150
1973年2月	170	【小説】天の魚(第十回)	63-73
1973年3月	171	【小説】天の魚(第十一回)	81-89
1973年4月	172	【小説】天の魚(第十二回)	112-123
1973年6月	174	【小説】天の魚(第十三回)	106-121

1973 年 7 月	175	【小説】天の魚（第十四回）	164-183
1973 年 8 月	176	天の魚（第十五回）	118-131
1973 年 9 月	177	【小説】天の魚（第十六回）	95-108
1973 年 11 月	179	【小説】天の魚（第十七回）	100-111
1973 年 12 月	180	【小説】天の魚（最終回）	66-80

（表 4）『苦海浄土』各版刊行の時間系列

年代	書名	出版社・出版形態	経緯
1969	『苦海浄土－わが水俣病－』	講談社単行本	『熊本風土記』に載った『苦海浄土』の初稿を集成。
1972	『苦海浄土－わが水俣』	講談社文庫本	1969 年講談社単行本から改稿されている。
1980	『続・苦海浄土-天の魚』	講談社文庫本	雑誌『展望』の連載を集成。
2004	『新装版 苦海浄土 わが水俣病』	講談社文庫本	1972 年版講談社文庫本から改稿され、原田正純の解説「水俣病の五十年」を加えた。
2004	『石牟礼道子全集・不知火 第二巻』	藤原書店	第一部『苦海浄土』は 1972 年講談社文庫『苦海浄土-わが水俣病』を底本とし、ルビと方言の説明を新たに付した。第二部『神々の村』は『辺境』（第一次～第三次/一九七〇―一九八九）に連載された稿を大幅に改め、加筆し、書き下ろした。
2004	『石牟礼道子全集・不知火 第三巻』	藤原書店	第三部の『天の魚』は 1980 年講談社文庫本『続・苦海浄土-天の魚』を大幅改稿し、ルビと方言の説明を新たに付した。
2011	『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集 III-04 苦海浄土』	河出書房新社	本書は、2004 年に藤原書店より刊行された『石牟礼道子全集・不知火』第二巻所収の「苦海浄土」（第一部 苦海浄土、第二部 神々の村）、および同第三巻所収の「苦海浄土」（第三部 天の魚）を底本とした。
2016	苦海浄土 全三部	藤原書店	本書は 2004 年藤原書店『石牟礼道子全集・不知火』第二巻「苦海浄土第一部・第二部」および第三巻「苦海浄土 第三部」を底本とした。

The publication history and the changes in reputation of “ Paradise in the Sea of Sorrow: Our Minamata Disease ”

Lin I Chen

Ishimure Michiko was a powerful figure in ecocritical literary circles, and her unique perspective from experiencing the industrial mercury pollution and resultant health disaster of Minamata disease influenced her view of the importance of living with nature, rather than in nature.

This essay collects all of the editions of her most famous work, “ Paradise in the Sea of Sorrow: Our Minamata Disease”. It analyses and compares them with each other in order to find the changes in reputation of her essay. Also, we can see that from the stylistics of the 1969 year edition it was recognized as reportage / non-fiction, but the 1972 year edition was reclassified as “ I-novel”. The stylistics of her work can also explain why she refused to receive the “Oya Soichi Non-fiction Literature Prize” in 1970.

Actually, after comparing the 1969 year edition with the 1972 year edition, we cannot find any significant or material differences between these two publications. There are some corrections of punctuation, place-names and some replacement of the Kyushu dialect into standard language. But the 1969 year edition contains 1 ~ 2 photographs of patients with Minamata Disease in each section. The introduction, written on the cover, also implies that all the stories in this book really did happen.

However, in the 1972 year edition, the editor Watanabe Kyoji insisted that this book was neither non-fiction nor reportage. From the early days of her activity, he had followed Ishimure when she visited the patients with Minamata Disease. So he could see that she did not take any notes, nor any sound recordings. She just stayed with the patients and served them like a nurse. Based on Watanabe’s observation, Ishimure was stunned when she saw her very first patient with Minamata Disease, Kama Tsurumatsu. From that moment, she was possessed by Kama Tsurumatsu’s spirit and the patient’s words. Later, her thoughts were transferred into her own words and were written down. This is the process of literary creation.

In 2011, the literary critic Ikezawa Nastuki gave a high reputation to this work, and regarded it as world literature. Now, in the crisis of the corona virus, we still need her wisdom to find the solution of living with nature.